新刊紹介：愛宕元訳注『遊城南記／訪古遊記』

森田　憲司

最近、西安周辺をはじめとして中国各地の唐代の史蹟についての調査、研究を精力的に続けておられる愛宕元氏が、京都大学学術出版会から『遊城南記／訪古遊記』を刊行された。タイトルにもあるとおり、宋の張礼の「遊城南記」、明の趙崎の「訪古遊記」の訳注を中心に、明の王九思と都穆の２篇の「遊終南記」の訳注と解説を付されたものである。訳註には、愛宕氏の現地調査に基づくデータも多く含まれている。筆者は唐代を研究のフィールドとする者ではないが、13, 14 世紀史料研究という視点からも、この訳註は注目に値する文献であることから、そういった角度から本書を紹介してみたい。

さて、本書の中心となっている２編のうち、「遊城南記」は、愛宕氏の解説によると、撰者の張礼が元祐元年 (1086) の閏２月に長安南郊の史蹟を探訪した際の紀行である。北宋時代の文献であるから、我々のテーマである金元時代の文物についての記述がないことは言うまでもないし、後代になって金元時代の史蹟として重要になる場所（たとえば楼観台）についても、撰者張礼の足は及んでいない。また、文中の「続注」と題された部分は金末元初の人の手になることを、愛宕氏が考証されているが、そこにも我々の関心とつながる情報はあまりない。したがって、我々のテーマである 13, 14 世紀の史料・文物と「遊城南記」との直接の関係は薄いが、あまり語られることのない宋代の西安地域の状況や、当時存在した文物、およびその環境を知るための文献としては有用なものである。

一方、「訪古遊記」であるが、撰者の趙崎は、明代の代表的な石刻書の１つである『石墨鐫華』の撰者でもある。彼についても愛宕氏の解説に従って紹介すると、鼇厓の人で、万暦 13 年（1585）の挙人であること以外は、あまり明らかではないということである。本書は万暦 46 年（1618）に『石墨鐫華』を編んだ直後の採訪の記録で、全体は「遊終南」、「遊九嵕」、「遊城南」の３部分に分かれている。「遊終南」は、楼観台、祖庭方面、「遊九嵕」は昭陵方面、「遊城南」は長安城の南方、慈恩寺、興善寺などが、おもな舞台である。そして、書かれているところによれば長安から拓本刷りの名工を呼び寄せたとあることからもわかるように、趙崎の関心の対象の中心は石刻、とくに隋唐代のものに対するものであったから、石刻に関する記事が内容の多くを占めている。

彼の住まいが鼇厓県にあったこともあって、その足はまず楼観台、さらには祖庭へと向かう。これらの場所は全真教の祖地であり、今日でも多くの石刻を残す場所である。本書においても同地の金元石刻への言及が少なくなく、多数の石刻が林立し、蒙古文字のものも多数あったと述べられている。残念ながら、趙崎が具体的に紹介しているものは、趙孟頫の「大元勅蔵御服碑」などごく一部の書法の上で注目されるものが中心で、すべての石刻の名前が挙げられているわけではないが、明代後半期における現地の状況を知ることができる貴重な文献である。また、昭陵をはじめとする他の史蹟の部分においても、金元の文物についての記事がある。

このように本書でまず注目されるのは、明代後半期における石刻の状況の記述であることは言うまでもないが、それとともに、現代では失われてしまっている文物への

言及も貴重な資料である。そういったものの一部を紹介してみよう。まず、祖庭重陽宮龍虎殿の至順の壁記や昭陵の孔頴達碑への至正の墨書の紹介があり、また、文字資料ではないが、楼観七真殿や、城南百塔寺に元代の壁画が残されていることが述べられているが、これらも今日ではどうなっているであろうか。草堂寺へ行ってはいても、元朝史研究者には有名な闊端太子令旨碑への言及はないように、趙嶠の関心の中心は唐代にあるから、悉皆的な記録としては期待できないが、それでも貴重な記録である。

私がここで本書を紹介しようと考えたのには、いくつかの理由がある。１つには、今回の我々の共同研究においては、石刻そのものが研究の対象であることは言うまでもないが、その現況（管理状況、所在場所の環境、さらには所在地の変化）などの把握と記録についても、作業の対象として重視していることがある。今回、愛宕氏によってこれらの文献が訳出されたことによって、一部ではあるとしても西安周辺地域の元代石刻の明代後半期における状況を知ることができた意味は大きいと考えている。さらに、上にも書いたように、愛宕氏はこれらの史蹟での自身の見聞を注記において述べておられ、現状の記録ともなっている。さらに、本書には愛宕氏自身が撮影された写真が多数掲載されているが、その日付を見ると、1995 年に撮影されたものが多い。中国における文物の撮影に対する規制は、近年になってより厳しくなっているから、これらの写真は貴重なものであると言えよう。

次に、趙嶠の遊記のような明代の文献の金元史料研究にあたっての有用性の認識である。明清以降の文献の金元（あるいは南宋）史料研究への活用については、筆者もいささか関心を有し、石刻書はもとより、地方志、寺観祠廟志などへと対象を拡大してきたが、このような資料群が存在することを、本書によってあらためて教えられた。こうした資料は、愛宕氏が本書で実現されているように、現地における現状の把握と相俟って、その価値がより発揮される。本書の注目すべき点はまさにそこにある。

昨今の中国の文物をめぐる環境を考えると、愛宕氏の調査の後にも資料を取り巻く環境に変化が生じているやもしれず、近年にこの地を訪れたメンバーに執筆を依頼するのが望ましいとも思ったが、できるだけ早く本誌で紹介したいと考えたため、森田が筆をとった。蕪雑であるかと思うが、ご寛恕を乞う。

2004 年 10 月　京都大学学術出版会刊行
Ａ５版 300 頁　4000 円（本体）

（もりた　けんじ　奈良大学）